

SHOW HEY シネマールーム

★★★★

女と銃と荒野の麺屋

(三槍拍案驚奇/A WOMAN, A GUN AND A NOODLE SHOP)

2009年・中国映画

配給/ワーナー・ブラザーズ映画・103分

2011(平成23)年9月19日鑑賞

梅田ガーデンシネマ

Data

監督：張藝謀 (チャン・イーモウ)
出演：閔妮 (ヤン・ニー) / 倪大紅
(ニー・ダーホン) / 孫紅雷
(スン・ホンレイ) / 小沈阳
(シャオ・シェンヤン) / 程
野 (チェン・イエ) / 毛毛 (マ
オ・マオ)

👁️👁️ みどころ

世界のチャン・イーモウが、なぜかコーエン兄弟の『ブラッド・シンプル』(84年)のリメイクに挑戦!これはきっと、長年あたためてきた趣味の方向に暴走?奇妙な邦題からも、同監督特有の色彩美が想像できるが、スクリーン上はそれ以上!

しかして、本来のテーマである、欲にうごめく人間模様の展開とその結末から学ぶものは?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■このタイトルの意味は?■□■

2011年5月27日に観た『サンザシの樹の下で』(10年)より1つ前に作られたチャン・イーモウ監督の本作(09年)は、中国語の原題が『三槍拍案驚奇』だが、中国語を2年半勉強している私でもこれは何のことかサッパリわからない。多分、邦題の『女と銃と荒野の麺屋』や英題の『A WOMAN, A GUN AND A NOODLE SHOP』はこの原題と全く意味が違うと思うのだが、何となく面白そう。

そこで、弁護士として何ゴトにも深い私がネットでさらに調べてみると、「イズムコンシェルジュ」の「今週末見るべき映画『女と銃と荒野の麺屋』」には以下のとおりの説明があった。すなわち、

「原題は『三槍拍案驚奇』。中国語の『槍』は、『銃』、もしくは『形や働きが銃に似た器具』、いわば、飛び道具のことである。チャン・イーモウは、剣、大砲、銃、矢を、画面いっぱい、迫力満点に撃ち放つ。『拍案驚奇』は、明末期の口語小説集のタイトルだ。直訳すると、『机を叩いて驚くほどの奇抜さ』といった意味だろう。」

そこでさらに「拍案驚奇」を調べてみると、広島大学中文HPに「拍案驚奇」の解説があった。なるほど、なるほど。

■□■コーエン版を知っても、知らなくても・・・■□■

チャン・イーモウ監督はジョエル・コーエンとイーサン・コーエンいわゆるコーエン兄弟の84年のデビュー作である『ブラッド・シンプル』に深い印象を残していたため、新しい映画を考えていたとき、その「リメイク」というアイデアが頭に浮かんだらしい。コーエン兄弟は『ノーカントリー』(07年)でアカデミー賞作品賞、監督賞など計4部門を受賞するなど今でこそ大監督だが、『ブラッド・シンプル』は当初ハリウッドでは引き取り手がないB級映画だったらしい。しかし、翌年のサンダンス映画祭で審査員大賞を受賞、さらにインディペンデント・スピリット映画祭で監督賞&主演男優賞を受賞するなどして玄人筋の大人気を博したらしい。プレスシートによると、これはテキサスの片田舎を舞台として、①酒場の経営者、②その若い妻、③その妻と浮気する酒場の従業員、④その浮気の調査を依頼された私立探偵という4人のキャラクターが、己の強欲のままにうごめきだすために殺人事件が起こり、スリラーへとなだれ込む映画らしいが、チャン・イーモウ監督はその映画のどこにどんな魅力を？

『ブラッド・シンプル』を知っている人は、その中国的リメイク版たる本作と対比すれば「対比の妙」を楽しむことができるが、『ブラッド・シンプル』を知らない人にはそれはムリ。しかし、『ブラッド・シンプル』を知らなくたって、ハチャメチャなB級作り(?)の面白い映画は、やっぱり面白い。

■□■本作の魅力その1 何ともハチャメチャな設定■□■

『ブラッド・シンプル』の舞台はテキサスの片田舎にある酒場らしいが、本作の舞台は？またその時代は？本作の舞台は邦題どおり「荒野の麺屋」だが、この荒野がどこなのかは明らかではない。さらに、本作の冒頭に登場し、麺屋の主人ワン(ニー・ダーホン)の若い妻(ヤン・ニー)に銃や大砲を売りつけるのはペルシャの商人らしいが、こんな商人が中国の辺境地帯に登場する時代って一体いつ？弁護士目でもまともに考えると、そんなこんな疑問が湧いてくる。

続いて、試しに撃った大砲の音に驚いて麺屋に駆けつけてきた大勢の辺境巡回警察官たちに、ワンの妻がおいしそうな麺を振舞うシークエンスが登場する。ここであっと驚く注目点は、①ワンの妻と不倫している若い麵職人リー(シャオ・シェンヤン)、②太っちょの麵職人ジャオ(チェン・イェ)、③ジャオが思いを寄せているチビの女性麵職人チェン(マオ・マオ)の3人が、生地づくりで見せる「生地回し」の神業。これを見ると、その技術の高さがわかろうというものだが、そこで起きる疑問も、人が誰も住んでいないこんな荒野で、なぜこんな麺屋が繁盛するの?ということだ。また、従業員の給料まで未払いにし

ている強欲なワンは、なぜ金庫の中にあんなにたくさんのカネを貯めこんでいるの？まあそんなこんな疑問があるが、本作に限っては、それらの疑問はすべて捨て、何ともハチャメチャな設定を楽しみたい。

■□■本作の魅力その2 極彩色の色彩美■□■

チェン・カイコー監督の『黄色い大地』（84年）では荒涼たる大地の黄色（土色）の美しさに、チャン・イーモウ監督の『紅いコーリャン』（87年）では花嫁やコーリャン酒の赤色の美しさに驚かされた。チャ



©2009, FILM PARTNER (2009) INTERNATIONAL, INC. ALL RIGHTS RESERVED.

ン・イーモウ監督の作品はその後、『紅夢』（91年）、『HERO（英雄）』（02年）、『LOVERS』（04年）、『王妃の紋章』（06年）などで「色彩美」が際立っているが、それは本作も同じだ。

『HERO（英雄）』では3つのストーリーが赤、青、白3つのカラーで見事に分類されていた（『シネマルーム5』134頁参照）が、本作では赤のような黄色のような荒地の土色に反比例するかのような、各登場人物の服装の色彩美が際立っている。ワンの妻は緑、リーはピンク、ジャオは赤、チェンは青だが、さてワンは？

ちなみに、誰がどう考えても男のリーの服がピンクというのは不自然だが、中国のトップコメディアンスターで、本編が長編映画デビュー作になったというシャオ・シェンヤンが演じるリーは雇い主の若妻との不倫という大胆な行動をとりながら、その内心はかなり臆病だから実はピンクがピッタリ？それに対し、あまり美人とはいえないが絶叫ぶりがすばらしい（？）男勝りのヤン・ニーには、あざやかな緑がピッタリ？他方、巡回警察官役のス・ホンレイは『初恋のきた道』（00年）や『王妃の紋章』そして『たまゆらの女（ひと）』（02年）などで私にも馴染みの演技派俳優だが、本作ではほとんどセリフなしの「怪演」に挑戦！そして、ワンからの殺人の依頼に応じて冷酷無比にそれを実行する（？）カネの亡者のようなリーは、全編を通じて鎧兜に身を固めているから黒がピッタリ？

■□■本作の魅力その3 人間描写■□■

昨今の日本男児は草食系ばかりだが、本作に登場する男4人のうち、ワンとチャンの2人は根っからの肉食系だし、一見気が弱そうで草食系に見えるリーとジャオも欲のつっぱり具合はやはり肉食系？「潜水艦もの」が面白い理由はその密室性にあるが、荒野の麺屋を舞台としている本作も密室性が高いため、その中で欲にうごめく人間模様を十分に楽しむことができる。しかも、本作では密室性のみならず、広い荒野の一点を捜しての「死体埋め」という大変な作業が不可欠だから、その対比が面白い。

人間の性欲、金銭欲、支配欲などはさまざまな小説や映画のテーマにされてきたが、本作で最も目立つのは金銭欲。高くふっかけておいて適当な線で手を打つという本作にみる中国式交渉術のテクニック(?)はさすがだが、殺人を請け負うことの見返りとして合意が成立した多額の金銭を受領すると同時にワンを平然と銃で撃ち殺してしまうチャンの金銭欲は一体どうなっているの？また、給料の未払分を金庫から持ち出すだけだから盗みではないとチェンに対して説得していたジャオの言行不一致ぶりをどう理解すればいいの？さらに本作では、チャンによって殺されたはずのワンが突然起き上がるシーンが数回登場するが、これは現実にはありえない話。しかし、女と金にあれほど執着しているワンなら、ひょっとしてそれもあり？

■□クライマックスの対決は？誰と誰？その結末は？■□

本作はテーマがシンプルだし登場人物も限定されているから、映画としての面白さはもちろん、舞台としても最適。そして、もし舞台でやるのなら、さしずめ三谷幸喜あたりが演出すれば、日本版のそれはかなり期待がもてるのでは？それはともかく、ワンの妻とリーの不倫を軸としてそれぞれの欲がうごめく4人の男と2人の女は、ストーリー展開に伴って1人また1人と殺され消えていくことになるが、それは一体なぜ？

しかし、4人の男と2人の女たちはそもそも人殺しなど全く考えていなかったはず。また、殺人罪の認定には「故意」が必要だが、少なくともワンの妻が銃を購入した時点では、ワンを殺害する故意を持っていたかどうかはかなり微妙。さらに、ワンからチャンへのワンの妻とリーを殺害してくれとの殺人の依頼(教唆)と、お金を対価としてのその承諾は確かに成立したが、さてその実行は？そんなこんなの表の展開と、人間の思い込みにもとづく裏の展開が、表裏一体となって1人また1人と消えていくわけだが、そのストーリーの面白さはあなた自身の目でしっかりと。しかして、最後に残るのは一体誰と誰？そして、その2人によるクライマックスの対決は？

コーエン兄弟の『ブラッド・シンプル』が玄人筋の人気を博したのは、きっと欲にうごめく人間模様が時にリアルに時にコミカルに描かれていたためだろうが、それはまさに本作も同じ。90分という時間に凝縮された、欲にまみれた人間模様をじっくりと視察したい。

2011(平成23)年9月22日記